

「灰谷健次郎の保育園日記」 灰谷健次郎 小学館 1985. 8/10 初版

灰谷健次郎

作家、昭和9年兵庫県に生まれる。大阪学芸大学卒業後、小学校の教師をつとめる傍ら、児童詩誌「きりん」の編集に携わる。46年、「兎の眼」、52年には長編「太陽の子」を発表。「ひとりぼっちの動物園」で53年度小学館文学賞受賞。54年、山本有三記念第一回「路傍の石」文学賞受賞。著書に「せんせいけらいになれ」「ワルのぼけっと」「対談 教えることと学ぶこと」「わたしの出会った子どもたち」など多数。

「太陽の子保育園」(神戸市)を設立 昭和58年度保育園設置
0歳児から6歳児、定員120名、保母15～16名

異年齢集団(異年齢クラス)「縦割り」
同年齢集団

人 一年 かなたにゆうすけ
えらい人よりもやさしい人のほうがえらい
やさしい人よりも金のない人のほうがえらい
なぜかというと
金のない人は
よくさみしいなかで
よく生きているからだ

どんなにいいことでも、子どもの興味を無視して、それを押しつけるのは間違いである。子どもの興味は引き出すもので、そのためには子どもに添うものが、まず体を動かし汗を流さなくてはならない。

それを保母たちが実践してくれた。大人が真剣に働いている姿を子どもに見せるのが大切な教育である。

食事について

かりに人から与えられたとしても、それは沢山の人の知恵と労働によるものだという自覚があれば、子どもは食事をすることによって精神的にも成長する。

食べ物はみんなのいのちである。いのちでない食べ物は何一つない。

そのいのちを食べているという実感と認識が人間を謙虚にするし、ぜいたくをいましめ、物を大切に作る原点にもなる。

うまくかわすということに意味づけをするなんて、詐欺師みたいなことをやっているものだから、とても自分の頭の中では考えられなくなって、本に頼ります。そして翌日、私は本のコピーを子どもの前にさらすのであります。本で結果を見ているものだから、その方向に子どもを入れていこうと、急ぎ足になります。これでは、子どもも大人も楽しくありません。

楽しい時間を持つには、やりたいことを見つめる時間とやりたい気持ちを持続させる勇氣を持つこと。

子どもから学ぶということは観念の世界の中にあるものではなく、感動から出発した人の意志と行動である。

教え導くことが先ではなく、今、目の前にいる子が悲しんでいればその悲しみを、苦しんでいればその苦しみを共に背負うことのほうが先で、教え導くことはそれからあとでよい。

苦悩の向こうの世界は誰にも見えないけれど、見ようとして歩いていくことは出来る。それが、生きるということだと思う。

幼児のことばの採集は、どうしてもやってほしい。

「るいちゃん」あなたのお母さんにしてくれてありがとう。

「きよちゃん（脳腫瘍、障害児）が泣くから泣きやみましようね」
泣いているごく小さな子どもが、その言葉を受けて泣きやむこともあるというから、きよこちゃんはもちろん、子どもってというのはなんて心優しい人間なんだろうかと、ぼくは思ってしまう。

ソビエトのコルネイ・チュコフスキーは、子どもの楽天性にふれて、自分に死が訪れてくるだろうなどということ、子供たちは絶対に認めようと言っている。

子どもにとって、あらゆる生命は対等の友だちであり、自己の死を肯定しないということは、また他者の死も肯定しないという首尾一貫した思想に貫かれている。
子供たちは、平和主義者。

子どもを教え導くことが先行している時の保母は混沌とし、ようやくそのことに気が付き、共に生きることが先なのだと思いつき至るとき光明が見えてくる。

「感覚統合」訓練

脳のいろいろな働きを単独ではなく、統合していく仕組み、そのための訓練の仕方

小さい幼児期に、手や体を思い切り使って遊んだ子は、学校に行きだして学習につまずくことが少ないとか、友人関係がうまくいくとか、つまり遊びが知らず知らず脳のいろいろな働きをつないで、よりよく働かせるというようなことです。

人間は悩むことによって自分を慰めるというやっかいな動物だ。

悩んでいる人間は、如何にも誠実らしく見える。しかし、悩みを慰めにしている人間は、どうしようもない怠け者だと言える。

そこで創造ということがある。

何かを創り出すことのみが人を高くする。

ぐじぐじと理屈ばかりをこねる人間がいる。あれやこれやと他者を批判することに急で、自分の足もとを忘れる人間がいる。わずかばかりの知識や経験によりかかって、知ったかぶりの振る舞いしか出来ない人間もいる。

いずれも創造精神と生活のもてない人の常である。子どもが偉大な創造者であることは、子どもに添うている人々はよく知っている。そばにかっこのお手本があるのに学ぶことが出来ない人々がいくらでもいる。

子どもと共に歩んでいないからである。

- 障害児と共に歩んで -

いのちは自由と平等という海ではじめて美しく輝く。